

令和 2 年度 第 1 回 屋久島世界遺産地域科学委員会
ヤクシカ・ワーキンググループ及び特定鳥獣保護管理検討委員会合同会議
議事概要

日時：令和 2 年 6 月 25 日(木) 14：00～16：30

場所：WEB 会議方式

議事(1)ヤクシカの生息状況等について

■主な意見

- ・永田のヤクシカの生息密度は低くなっているにもかかわらず、捕獲頭数が多いのはなぜか。一湊や西部林道からヤクシカが永田地域経由で移動している可能性が理由として考えられるが。(矢原座長)
- 林道工事に伴う支障木伐採跡地が餌場になっている可能性がある。(鹿児島県環境技術協会)

議事(2)令和元年度及び令和2年度の取組について

■主な意見

- ・猟友会では現在、70 歳以上の方が活躍されているが、5 年後、10 年後も見据えた体制の検討が必要であると認識すべきである。(鈴木委員)
- ・指定管理鳥獣捕獲事業はいろいろな面で管理監督ができるので、PDCA サイクルを回して良かった点、悪かった点をしっかり検討していただきたい。(鈴木委員)
- ・捕獲個体の処理が「埋設」となっている中に、自家消費が含まれていると思われるため、実態に則した表現にしてほしい。(荒田委員、矢原座長)
- ・西部地域の個体数管理について、目標の生息密度が 16～20 頭/km²では高い。植生回復を目標とするのであれば、数頭/km²レベルまで低密度化すべきである。捕獲したけれども効果がないというのは良くない。(矢原座長)
- また、5 年かけて一定ペースで目標頭数に近づける必要もない。(松田委員)
- ・捕獲方策として、大型囲い罠・小型囲い罠・狙撃が挙げられているが、捕獲圧を強化するのであればくくり罠も検討の一つに入れた方がよい。(濱崎委員)
- ・今回の計算で生息密度 5 頭にするためには、初年度に 6 割の 30 頭を捕獲が必要である。また、雌の捕獲が重要になってくるので、初年度に雌 15 頭という目標があってもよい。(松田委員、矢原座長)
- ・植生の回復を考えた時、その地域の現在の餌資源量が、回復のためには大きな要素になる。今の瀬切の植生の状況はかなり餌資源が少ない状況のため、1 km²あたり 5 頭だと、少しずつ回復してくる植生を残ったシカが食べ尽くしてしまうという状況が懸念される。このため、5 頭未満に減らすことを目標にすべきで、それを 5 年間の中で順応的に管理していくのがよいと考えている。(濱崎委員)
- ・アメリカでは、ある特定の地域に捕獲圧をかけて空白地帯を作り、植生の回復などを図る取組

があり、今いる個体群密度の 3 割以下に落とさないと空白地帯を維持できないことが報告されている。また、捕獲を一度始めると同じ場所での捕獲が難しくなっていくことから、特に初年度に多く捕るべきである。(八代田委員)

- ・目標密度は、他の地域でも目安とする数字でもある 1 km²当たり 5 頭としたい。なお、初年度については、初めての場所での捕獲であるため、目標密度の実現を目指して可能な限り多くの頭数の捕獲を行うという形としたい。(環境省)
- ・捕獲した個体の処置について、可能な限り胃内容物や腎脂肪等、食性や栄養状態に係る科学的なデータを取ることが望まれる。(矢原座長)
- ・ヤクシカの生息密度等についてはある程度動向が分かってきたが、ヤクシマザルもシカとならぶ屋久島の代表的な野生動物であるため、生息頭数の把握など基礎的な情報収集は必要ではないか。サルについても保全と管理の観点から必要以上に捕らない減らさないことも念頭に置いて WG の検討項目に含めてはどうか。(手塚委員)
- ・ヤクシマザルを世界遺産の WG の取組として位置付けるかについて、ヤクシマザルは自然植生には影響を与えていないという点を考慮すべき。サルを対象とするなら、「群れ管理」という方法で評価することが考えられる。(松田委員)
- ・ヤクシマザルについては、その総括した直近の論文を参考にしつつ、引き続き念頭には置いておくこととしたい。(矢原座長)

議事(3)森林生態系の管理目標について

■主な意見

- ・森林生態系の管理目標については、事務局が示した方針で進め、現状把握・評価結果について WG 委員で検討いただくこととしたい。(矢原座長)

議事(4)その他

ヤクシカの集団遺伝構造についての解析結果について、矢原座長より情報提供